

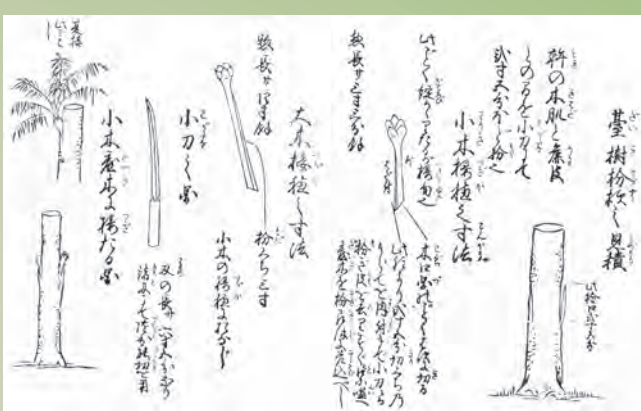
「榎の道」構成遺産

久留米藩の「苗木づくり」と「品種改良」

榎の苗木づくり

榎（ハゼノキ）の有用性を知り、久留米藩ではやくく苗木作りの研究に取り組んだのが竹下周直で、宝暦年間、松山榎を発見しました。

大蔵永常著「農家益」で榎の最高品種と評されたことで、莫大な数の「松山榎」の需要が生まれました。それに応えるには、榎苗の育成方法、特に「接ぎ木」と呼ばれる苗木技法が不可欠でした。



榎の接ぎ木が成功し、新芽が出ている様子。

「接ぎ木」とは、増やしたい木の枝を採取し、他の土を「台木」の苗木に接ぎさせる技法です。これら接ぎ木技術の向上が、以降の榎苗木の里としての発展につながりました。

また、品種改良については、「松山榎」をもとに、豊凶の年の差が少なく、より安定した収穫が得られる「伊吉榎」が作りだされ、九州一円に出荷されるようになりました。現在、これら先人の功績が碑として残っています。

生産から流通まで

江戸時代に久留米藩によって奨励栽培された榎からは、毎年多くの実が収穫されました。これらの実はいまの産地に集められ、粉にして蒸し、圧搾機で蠟が搾り出されます。榎は筑後川を下り、船で大坂へ出荷され大きな利益を出しました。明治時代になると、仲買人や「蠟屋」と呼ばれる製蠟業者が活躍し、海外輸出も盛んに行われるようになりました。



蠟型（明治～昭和10年代）。写真の「第三商店」は大阪の蠟問屋（欧米輸出）で、久留米に出張所を設けていた。

こうして蓄積された富をもとに吉井小郡、草野などの町では銀行を営む者が生まれました。このエリアには、収穫から加工、流通にいたる設備や道具、榎で蓄積された富の名残が残っています。

筑後川遺産「榎の道」の物語（ストーリー）は、江戸時代の久留米藩エリア、特に筑後川流域を中心に点在する歴史遺産で構成されています。

それらを「榎の苗木づくり」、「生産から流通まで」、「二つの榎並木」、「芸術としての榎」の4つのテーマに沿って紹介します。

1 「農人錦の囊」

～榎栽培技術書～

寛延3年(1750)に竹下周直が榎栽培の豊富な経験と知識を傾けて著した技術書(旧山本郡柳坂組大庄屋を勤めた上野家に伝来した写本)。

内容は、榎実の善し悪しの選び方に始まり、苗の仕立て、接ぎ木、実の採り方、害虫の駆除など、30項目に及ぶ。



久留米市教育委員会蔵

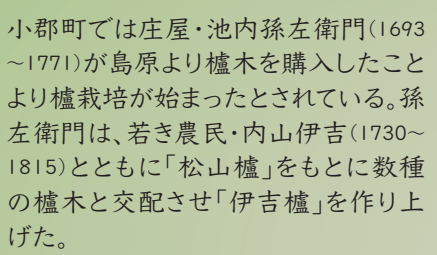
2 鍵水九左衛門の石灯籠



うきは市山北
おおやまつみ
大山祇神社

寛延2年(1749)、久留米藩家老の有馬主膳は、生業郡山北村大野原の松林への榎苗の植栽を山守・鍵水九左衛門に命じた。九左衛門は薩摩から仕入れた唐榎苗1万本を植えた。大山祇神社には榎の事業成功を祈念して九左衛門が寄進した石灯籠が残っている。

3 内山伊吉碑



伊吉榎



小郡市小郡
東町公園内

4 植木苗木発祥の碑



久留米市田主丸町植木 諏訪神社境内

天保3年(1832)亀王騒動の後、竹下家の後任として、秋山勘九郎が亀王村大庄屋に就任した。勘九郎は「伊吉榎」を主力に多くの榎苗を生産した。榎苗作りで培った接ぎ木技術は、他の樹木生産技術にも及び、やがて久留米は榎苗木のまちとして全国に知られていく。



5 ドイツ兵撮影「榎の実ちぎり」写真

久留米大学御井図書館蔵

第一次世界大戦における日独戦争時(1914)に俘虜となったドイツ軍予備将校エドゥアルト・ヴィルは、5年間に熊本と久留米の収容所で過ごした。その時に久留米の収容所で当時の日本人が榎の実を採る様子を撮影した貴重な写真。

(大庭卓也 小澤太郎編「熊本・久留米俘虜収容所(1914～1920)の風景」)



久留米市 国分町

6 上野抜天園

収穫された榎の実はいま、各地の仲買人によって実が集められて「板場」と呼ばれる製蠟工場へ集められる。上野家は明治時代から、冬はちぎり子を雇って近所の榎の実を集めて、柳川や筑後、吉井などの製蠟所に卸していた。画像は榎の枝を近くに寄せる竹製の「かぎんちよ」。



久留米市
草野町吉木

7 木蠟製造道具



久留米市教育委員会蔵

明治から大正にかけて作られた圧搾法による木蠟製造道具。明治30年(1897)頃に創業した旧亀崎製蠟所で使用されていた。この時期、ほとんどの製蠟所で人力に頼った立木式蠟絞り機から、モーターを使った画期的な圧搾機へと切り替わっていった。

8 田中久重生誕地

田中久重は寛政11年(1799)久留米市内通町生まれ。幼少より機械を作ることが好きで、『からくり儀右衛門』として親しまれた。「田中近江大掾」によると、一世を風靡した「懐中燭台」や、榎の実から蠟を搾る「蠟締め機」も久重が発明創作したという。



福岡県久留米市通町

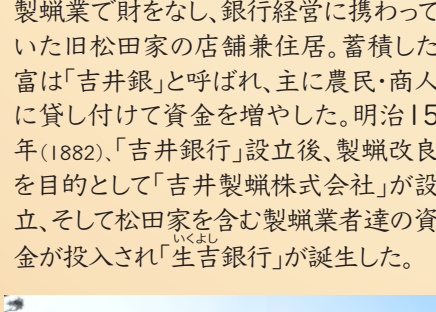
9 平田家住宅



小郡市小郡

幕末から明治初期に、第4代伍三郎が製蠟業により財産基礎を作った平田家。明治7年(1874)、親族で貯金組合「伍盟社」、明治26年(1893)、第5代大蔵を頭取とした伍盟銀行を設立した。小郡では平田のように木蠟業の繁栄により、貸金業を営み、利益を運用して潤う者が多く、「小郡銀」とも呼ばれる。

10 居蔵の館



うきは市吉井町

製蠟業で財をなし、銀行経営に携わっていた旧松田家の店舗兼住居。蓄積した富は「吉井銀」と呼ばれ、主に農民・商人に貸し付けて資金を増やした。明治15年(1882)、「吉井銀行」設立後、製蠟改良を目的として「吉井製蠟株式会社」が設立、そして松田家を含む製蠟業者達の資金が投入され「生吉銀行」が誕生した。

11 鹿毛家住宅



久留米市草野町草野

鹿毛家は、江戸時代から榎蠟製造や醤油醸造、質屋などを経営し、盛時の屋敷には数十棟の蔵が並んでいたという。図面によると、榎の実を貯蔵する「枡庫」は他の貯蔵面積に比べ、かなり広い面積を占めていた。製蠟までしていたかは不明だが、帳簿では鹿毛家は1,171本の榎の木を所有していた。

二つの榎並木

耳納山地から流れ下る川沿い(曾根)にある

江戸時代に活況になった榎産業に合わせ、久留米藩は「荒地榎植立吟味役」を設立し、空き地や曾根など至る所に榎を植えた。しかし時代と共に榎蠟の需要減で価格が低迷したため、榎は次々と伐採され他の作物に置き換えられて行き、殆ど見られなくなる中、かろうじて残ったのが、耳納山地から流れ下る川沿い(曾根)の榎並木です。それが柳坂曾根と延寿寺曾根の榎並木です。柳坂曾根の榎並木は、1964年に福岡県天然記念物に指定されましたが、なお伐採の危機にさらされるなど、榎の人々の理解は進んでいませんでした。そんな中、住人の香月徳男が立ち上がり、シンポジウム、ハゼまつりなどを開催。多くの人の関心を集め、保存活動の機運を盛り上げて行きました。その思いは今も地元への保存会に受け継がれ、200本を超える並木として残っています。



また、うきは市の延寿寺曾根の榎並木でも、10年ほど前から紅葉の時期に地元有志によるライトアップや、子ども達との榎の実ちぎり体験など、榎並木を大切に守つていくという住民たちによって保存活動が続けられています。

芸術としての榎

戦前までは、筑後のいたるところに榎が生い茂り、秋には鮮やかに紅葉する風景がみられました。そのなかで生まれ育った文化人・芸術家たちは、歌や文学、絵画などに、ふるさとの榎のある風景を、数多く残しています。



松田 諦品 《榎紅葉》 1949年
油彩・カンヴァス 45.9×53.1センチ 久留米市美術館蔵

16 青木繁・田中彦影碑

昭和47年(1972)、柳坂曾根の榎並木を保存して後世に残そうと、画家・青木繁の歌碑とホトトギス派の俳人・田中彦影の句碑が建立された。



久留米市山本町豊田
柳坂曾根の榎並木

14 日本一榎ろうそく

平成9年(1997)、財団法人久留米市総合管理公社の設立10周年記念事業で製作。柳坂曾根の榎の実を竜崎製蠟所で搾り、愛知県の磯部ろうそく店が和ろうそくの本体を製作、兵庫県の俳画師・安達しげをが榎の絵付けと、青木繁の短歌を書き上げて完成した。



久留米市山本町豊田

12 延寿寺曾根の榎並木

全国でも唯一、小学校に隣接している榎並木。保存運動が盛んになり、遊歩道が整備されたことで、散策を楽しむ人も多い。毎年紅葉の頃、地元の有志によるライトアップで賑わう。12月には小学生たちも参加する榎の実ちぎりや榎ろうそく作りなど、地域に根ざした体験活動が行われている。



うきは市福益

15 けしけし山の青木繁之碑



久留米市山本町豊田

昭和23年(1948)、青木繁が故郷への思いを詠った「榎多き国」。坂本繁二郎の文字デザインによる歌碑が兎山(けしけし山)に建立された。毎年3月の青木繁の命日に「けしけし祭り」を開催。

13 柳坂曾根の榎並木



久留米市山本町豊田

昭和39年(1964)5月、県の天然記念物に指定された榎並木。南北約1.2kmにわたって、樹高5～6mの堂々とした200本以上の榎が現存している。江戸時代に植えられ、これまで永勝寺への参道として、又かぶと山登山道への並木として親しまれてきた。毎年11月の紅葉時は、同保存会により「ハゼまつり」が開催され多くの観光客が訪れる。